

# 初対面二者間会話における話題導入頻度と 対話相手の年齢・社会的地位・性の関係について<sup>1)</sup>

宇佐美 まゆみ

## 1. はじめに

日本人同士の初対面二者間の会話分析に関する先行研究から、初対面二者間の会話における言語行動には、会話の構造、話題導入の仕方やその展開などに、スクリプトが存在すること（宇佐美、1993 a ; 宇佐美・嶺田、1995）や、対話相手に応じた話題導入の仕方やその頻度、スピーチレベルのシフト操作、中途終了型発話の使用などの会話のストラテジーが用いられていることが明らかになりつつある（宇佐美、1993 b ; 1994 ; 1995）。これら会話のストラテジーの使用は、円滑なコミュニケーションを保つための言語ストラテジーとしての“politeness”（Brown & Levinson, 1987）とも密接に関係しており、このような日本人の会話のストラテジーに関する基礎研究の成果は、“politeness theory”の研究に貢献できるのみならず、単なる文法教育を越えた、コミュニケーション教育として捉えられつつある日本語教育についても、示唆するところが多いと思われる（宇佐美、1993 b ; 1993 c ; 1995）。本研究は、外国人と日本人のコミュニケーション教育への応用をも視野に入れた上で計画された、日本人の初対面二者間会話の総合的研究であり、日本人の言語行動における原則を見出すための基礎的研究である。

## 2. 本研究の最終目的

先行研究の結果より、初対面二者間の会話における話題導入の仕方やその頻度、ダウンシフト（敬体の使用から不使用へのシフト）やあいづちの頻度、終助詞（間投助詞）「ね」の頻度などは、Brown and Levinson（1987）の“politeness theory”で扱われている“politeness”と深く関わっていることが示唆されている。（宇佐美、1993 a ; 1993 b ; 1993 c ; 1994 a ; 1994 b ;

1994 c ; 1995 ; Usami, 1993 ; 1994 ; 1996) (“politeness”を「丁寧さ」と訳さない理由、この理論の概観等については、宇佐美、1993 c ; 1994 a)を参照されたい)。しかしながら、それらの研究においては、未だ被験者の数が充分でないなどの問題点もあり、結果を直ちに一般化するには至っていなかった。

そこで、本研究では、最低限の統計処理が可能な範囲に被験者数を増やし、文字起こし資料・コーディング資料等をデータベース化することによって、研究材料の充実と整理を企図するとともに、他の研究者にもデータを公開・供給して追試の可能性を開き、研究成果を研究者間で共有できるような形にまとめることを最終目標としている。

また、比較的新しい領域である会話分析・談話分析研究においては、データの収集法、文字化の原則、分析の方法論等様々な面において、研究者間で共有できる基本的事項すら確立していない感がある。本研究は、会話分析を恣意的な分析を越えた客観的なものにし、その知見を蓄積することによって、研究者間で共有できるようなものにしていくための、一方法論を提案するものでもある。

### 3. 本論文の目的

上記のような長期的な目的を踏まえ、本論文では、特に、言語体系外の社会・文化的要因（当該の会話外の要因という意味でグローバル要因と呼ぶ）の中でも、従来より敬語行動に強い影響を及ぼすとされてきた、話者間の年齢、或いは、社会的地位の差（Brown & Levinson の理論の「力関係」の要素と仮定）、及び性別の違いが、話題導入の頻度やその方法にいかにか影響を及ぼすかという点に絞って、分析結果を報告する。

## 4. 方法

### 4-1. 実験計画

本研究では、主に、話者間の相手の属性に関する認知（いわゆる目上、同等、目下の認知）が、話題導入の頻度や方法にいかにか影響を与えるかを分析

するため、Brown and Levinson の “politeness theory” の枠組みを借り、“linguistic politeness” を規定するとされている三要素、「力関係」「社会的距離」「負担の度合」を以下のように統制した。「社会的距離」と「負担の度合」については、それぞれ、初対面の相手と、同様の場面で同様の話題について話してもらうことによって一定条件を確保した。その上で、「力関係」（本研究では、年齢と社会的地位の上、同、下と仮定した）と「対話相手の性」を変化させるという実験計画に基づき、女性12名のベースの被験者に、それぞれ同性の「目上」「同等」「目下」、異性の「目上」「同等」「目下」、の計6通りの相手と約15分ずつ会話をしてもらい、合計72会話を採集した。被験者の組み合わせの条件は、右の図-1に表した。

#### 4-2. 実験手続き

すべての会話は、名前も含め、互いにほとんど相手についての情報を知らされていない初対面同士の会話である。被験者には、特に「話題」は与えず、懇親会などで初めて会った人と話をするようなつもりでできるだけ自然に話すよう、また、この実験自体についてや、実験者との関係等については言及しないよう指示した（インストラクションの詳細は、Usami, 1995を参照のこと）。実験者が二人を引き合わせた後は、始めの自己紹介の部分から録音するよう伝え、その後実験者は退室した。会話終了後は、フォローアップ・アンケートを行い、すべての被験者に、①相手の年齢・社会的地位をどう認知したか。②相手が初対面の相手として話しやすかったか否か。③録音を意識せず自然に話すことができたか、についてを、また、会話協力が2回目以上の被験者については、①～③に加えて、④その会話が初めてではないことが、自分の話し方や話の内容に影響を与えたか（繰り返しの影響）等について、5段階評価で評定してもらうと同時に、自由記述も求めた。（フォローアップ・アンケートの詳細についても、Usami, 1995を参照のこと）

#### 4-3. 被験者

被験者は社会人として適当な日本語を話すと思われる、有職の女性<sup>2)</sup> 延べ

48名、男性延べ36名である<sup>3)</sup>。どの被験者も東京近郊在住で、高校卒業の女性1名を除いて、大学卒業者である。

女性12名（実際の平均年齢34.8歳）を「ベースの被験者」とし、対話相手の被験者は、女性・男性延べ各36名からなり、それぞれ「目上」（実際の平均年齢は、女-45.7歳、男-43.8歳）、「同等」（同、女-34.9歳、男-34.5歳）、「目下」（同、女-23.7歳、男-25.5歳）の相手として、ベースの被験者にそれぞれ均等に割り当てられた。一人のベースの被験者が行った会話相手の条件を以下の図-1に示す。

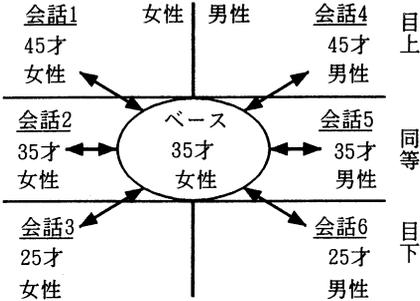


図-1 一人のベースが行う会話の相手の条件  
(実験計画)

4-4. 分析方法

4-4-1. 文字化の原則

上記の方法で採集した72会話について、初対面の会話の特徴が最もよく表れる部分である最初の5分間を、“CHILDES system” (MacWhinney and Snow, 1990 ; MacWhinney, 1991) を参考に、筆者が独自に考案した「文字化の原則」(宇佐美、1996 ; 宇佐美・嶺田、1995) に従って文字化した。「文字化の原則」は、基本的には、①各発話のコーディングがしやすく、よってデータベース化がしやすいものであること、且つ、②質的分析の際に読みやすいものであること、③対人機能に重要な役割を果たすと考えられる音声情報(イントネーション、笑い、声の調子等)は、卜書的にして、なるべ

く多くを記しておく、という三点を最重視して考案した。ここでは「発話」の定義と「ライン変えの原則」について説明するにとどめる。

「発話の定義」-実際の会話における話し言葉では、いわゆる文中にあいづちが入ったり、文末が省略されたりすることが多い。また、文法的には一単語に相当するものだけで、実質的な言語機能を担っている場合もある。よって、ここでは、一単語であったり、また逆に長い文の途中であいづちが入るなどして、話者が一旦、或いは、数回交代したりしていても、同一話者による意味的に一つのまとまりをもった「文」を、中途終了型発話も含めて「一発話」と数えた。例えば、以下の表-1で、ライン番号24、26にまたがっている森下の発話は、途中に山田の発話が入っているが、一発話と見なす。よって、後述の「発話番号」の付け方の原則により、ライン番号24、26の発話番号は、共に21となる。

以上の「発話」の定義に基づき、基本的には同一話者の連続した発言でも、一発話ごとにライン変えを行った。これは、一発話ごとにコーディングするために必要だからである。また、一発話の途中でも、はっきりしたあいづちなどによって、話者が一時的に変わった場合は、それがわかるように常にラインを変えた。ただし、相手の発話にオーバーラップする、「ええ、ええ」「ふーん」等、比較的小声のあまり意味のないあいづちは、発話者の発話中の最も近いと思われる場所に、(ええ、ええ)のように( )に入れて挿入した。

以上のような原則でライン変えをしていた文字化資料には、「ライン番号」と「発話番号」を区別して二通りの番号を割り当てた。「ライン番号」は、文字起こし資料を例示する際、抜粋した行を指し示すときに便利であるためと、ラインの数は各話者の「発話量」の目安とすることが可能であることからつけられた。また、「発話番号」は、一人の話者の意味的にまとまりをもった「一発話」が同定しやすいように、途中であいづちや相手の発話などによって中断されて、数行にわたっていても、意味的にまとまりをもった一つの発話には、同じ発話番号をつけることによって、それが一発話であることが分かりやすくなるようにした。

以上のような原則に従って、文字起こし資料をデータベース化していった<sup>4)</sup>。

以下の表-1に、データベース内容例（「ライン番号」「発話番号」の付け方、「話題導入コーディング」例を含む）を示す。

表-1 データベース内容例

会話番号：13（ベース：山田 相手：森下） 年齢 地位 年齢 地位 （相手の属性：男，目上）（ベース評価：5 5）（相手評価：2 2）				
ライン番号	発話番号	発話者	話題 カテゴリ	内 容
24	21	森下	—	（前略・・・山田の助手としての仕事の話をしていた） ああじゃそちらの専門のお仕事っていうか研究とか><<> <>ええ、研究とか。><> プラスいっぱいあるわけですか。 普段の勤務時間に研究はまずできないような状況です。 ある意味では、研究日とかいただいていますので（ええ） あの一、まあ、自由になる日はあるんですけども、 平日でも。 （この後、山田の研究日の様子を話す・・・後略）
25	22	山田	NON	
26	21	森下	INT	
27	23	山田	NON	
28	24	山田	NON	

以上のような原則に基づく、発話の認定法やライン変えの原則の信頼性を確認するために、第一認定者（筆者）と第二認定者<sup>4)</sup>が、全文字化資料の8.3%を、それぞれ別個に認定し、その判断の一致度を Cohen's kappa (Bakeman and Gottman, 1986) を用いて確認した ( $k = 0.93^{5)}$ )。その上で、第一認定者が全文字化資料の発話・ライン変えの認定を行った。

#### 4-4-2. 「話題カテゴリ」の分類法

すべての発話を以下の3種類に分類した。

- ①「挨拶 (GRT)」- 最初の挨拶、自己紹介の部分の発話
- ②「話題導入 (INT)」- 以下の定義に基づいた、一つの話の枠の発端となったと解釈される発話
- ③「非話題導入 (NON)」- 上記の2種類以外の発話

従来から、「話題」(テーマ、トピック)については、いろいろな研究者が様々な定義を行っているが(その幾つかの概観については、メイナード、1993

を参照のこと)、本研究では、「話題」の区分を、Brown and Yule (1983) の定義を参考に、原則として、「意味的にまとまりをもった枠組み」と捉える。従って、「話題導入」は、一つの話題の「枠」が始まる発端となった発話と捉えている。また、本研究では、「話題導入頻度」を、会話の進行権を握っていることの指標として捉えること、初対面の会話では、一つの話題が深く掘り下げられることが少ないという報告 (Usami, 1994 ; 宇佐美, 1993 b ; 宇佐美・嶺田, 1995) 等を参考に、一つの話題の枠を、比較的細かく捉えた。よって、話題の移行、変更、以前の話題への回帰等のきっかけとなる発話は、すべて「話題導入」としてコーディングした。

話題導入については、筆者と第二認定者<sup>4)</sup>とで合議の上、コーディングをしていった。話題カテゴリーのコーディング例については、前出の表-1を参照のこと。

## 5. 結果

以下に、主な結果を示す。

### 5-1. データの妥当性について

#### 5-1-1. 対話者同士の年齢・社会的地位の認知

実験者がベースの被験者に対して、「目上」「同等」「目下」と捉えて割り当てた対話者の組み合わせについて、被験者同士がいかに捉えていたかを、フォローアップ・アンケートで確認した。その結果の一部を以下の表-2に記す。

表-2 ベースの被験者の対話相手の年齢・社会的地位の評定平均値

実験者割り当て	年齢評定値平均値	社会的地位評定平均値
目上 (45歳前後) 女	4.58	4.50
男	4.83	4.42
全体	4.71	4.46
同等 (35歳前後) 女	2.58	2.83
男	2.83	3.33
全体	2.71	3.08
目下 (25歳前後) 女	1.42	2.50
男	1.42	2.42
全体	1.42	2.46

注) 1-かなり下 2-少し下 3-だいたい同じ 4-少し上 5-かなり上

表-2から分かるように、平均値でみる限り、年齢の評定値は、実験者の割り当てとほぼ一致することが分かる。社会的地位の評定値に関しては、上、同、下の順は一致しているが、同等と目下の差が年齢ほどきれいに出ていない。これは、特に年上に当たる被験者が年下の相手の社会的地位を「下」と評定することに抵抗を示しがちであったことによるものと思われる。自由記述には、「相手の社会的地位というようなものを評定することに抵抗がある」というような反応もいくつか見られ、年齢に関しては、「下」と評定しながらも、社会的地位に関しては、「だいたい同じ」というように、年齢ほど、上下をはっきりさせない傾向があった。次に、評定度数を表-3に表す。

表-3 ベースの被験者の対話相手の年齢・社会的地位の評定度数

評定値	実験計画	「年齢」評定度数	「社会的地位」評定度数
5 (かなり上)	24	17	14
4 (少し上)		10	15
3 (だいたい同じ)	24	12	24
2 (少し下)	24	18	19
1 (かなり下)		15	0

実験計画では、年齢・社会的地位ともに、評定値4~5を「目上」、3を「同等」、1~2を「目下」と捉えていたが、結果は上記表-3のようになった。表-3が示唆しているのは、被験者が「年齢」に関しては非常に敏感で、数歳の違いを少し上、または下と評定し、「だいたい同じ」と評定した被験者が、計画より少なめになっているということである。また、「社会的地位」については、前述のように、年上に当たる被験者が年下の相手の地位を「下」と評定することに抵抗を示している傾向が、「少し上」、「かなり上」が若干計画より多めになり、「かなり下」と評定した人が0という結果によく表れていると言えよう。

しかしながら、先に見た表-2から言えるように、平均として、ほぼ実験者の上・同・下の割り当てと被験者の認知は一致しており、データは妥当であるとみなしてよいだろう。分析にあたっては、今回は、自然会話の分析としては多量のデータに基づいて、「話題導入頻度」にかかわる大まかな全体

的傾向を見出すことが主目的であるので、今回の集計・分析は、72組の会話すべてを対象として行うことにした。

### 5-1-2. 収集された会話データの「自然さ」について

会話後のフォローアップ・アンケートで、相手が初対面の相手として話しやすかったか、録音を意識せずに自然に話すことができたか、また、会話協力が2回目以上の被験者については、会話を繰り返したことの影響の有無等について、5段階評価と自由記述で回答してもらった。その結果、すべての会話において大きな問題はなかったことが確認された<sup>6)</sup>。

### 5-2. 話題導入頻度

ベースと対話相手それぞれの話題導入頻度の平均値を、全体平均、対女性平均、対男性平均の順に以下の表-4、5、6に示す。

表-4 話題導入頻度の平均1(全体)

相手の分類	相手の平均年齢	年齢+社会的地位の評価		話題導入頻度		話題導入の相対頻度
		ベース	相手	ベース	相手	ベース
目上	44.7	9.16	3.83	5.20	8.12	39.8%
同等	34.7	5.79	5.95	5.95	7.41	45.9%
目下	24.6	3.87	8.50	7.79	7.12	53.0%

表-5 話題導入頻度の平均2(対女性)

相手の分類	相手の平均年齢	年齢+社会的地位の評価		話題導入頻度		話題導入の相対頻度
		ベース	相手	ベース	相手	ベース
目上	45.7	9.08	3.58	4.41	8.66	34.5%
同等	34.9	5.41	6.00	6.00	7.25	46.9%
目下	23.7	3.91	8.41	8.00	7.58	52.7%

表-6 話題導入頻度の平均3(対男性)

相手の分類	相手の平均年齢	年齢+社会的地位の評価		話題導入頻度		話題導入の相対頻度
		ベース	相手	ベース	相手	ベース
目上	43.8	9.25	4.08	6.00	7.58	45.2%
同等	34.5	6.16	5.91	5.91	7.58	44.9%
目下	25.5	3.83	8.58	7.58	6.66	53.9%

表-4に表れているように、ベースの被験者の話題導入頻度は、対目上→同等→目下の順に、高くなっていくという全体的傾向を示した。これは、Brown and Levinsonの理論が予測する結果であり、これまでの先行研究の結果を追認する形となった。しかし、対女性、対男性別に見てみると、表-5に示されているように、相手が同性である女性の場合は、この傾向がより顕著に表れているが、表-6に見られるように相手が異性である男性の場合は、ベースの被験者は、若干ではあるが、同等の男性との会話より、目上の男性との会話において、話題導入頻度が高くなっている。今回の数値の差は非常に小さく、この差が統計的に有意なものか否かはわからないが、過去の研究においても、年齢・社会的地位の上下の影響は、同性の場合に、より顕著に表れるという傾向が出ており、相手が異性の場合は、「性」の要因が何らかの影響を与えているという結果が報告されている(宇佐美, 1994c; 1995)。

Brown and Levinsonの理論で politeness を規定するとされている三要素のうち、社会的距離 (social distance) に、性の要素も含まれていると考えることもできるが、その場合、同性同士の方が社会的距離が小さく、異性では大きいと考えられる。それでは、本研究の結果のように、同性の目上の相手や、異性の同等の男性より、社会的距離や力 (power) が大きいと考えられる異性の目上の男性との会話において、ベースの被験者の話題導入頻度が高くなっていることは説明できない。フォローアップ・アンケートにおいては、「年上の男性にはこちらをリラックスさせようとの配慮が見られることが多く、目上にあたるにもかかわらず、かえって話しやすかった」というような報告もいくつか見られた。このような印象が、特定の被験者(当該の目上男性)の個性によるものか、目上の男性に一般的に当てはまるものかは、今後さらに検討していく必要があるが、いずれにしても、こういった心理的側面には、単に相手の年齢や社会的地位のみならず、「性」の要因の影響が働いていることが示唆されていると言えよう。しかし、この点は、Brown & Levinsonの politeness theory ではあまり触れられておらず、今後検討を要する点であるということが明らかになった。

## 6. おわりに

Yule は、“Pragmatics” (1996) の中で、これまでのターン・テイキングのメカニズム研究を振り返って、比較文化的観点を取り入れた以下の二つの研究が欠けていたことを指摘し、それらの必要性を説いている。第一は、様々な文化における会話の中で「沈黙」がどんな役割を果たしているのかについての研究であり、第二は、同様に様々な文化において、会話という相互作用がいかに進んでいくかということの構造的基礎ともなっている、社会的に規定されている「話す権利 (right to talk)」に関する研究である。

本研究は、後者の、ある意味で社会的に規定されている「話す権利」の一指標として「話題導入頻度」を捉え、他の文化との比較も念願においた上で、まずは日本人の初対面二者間会話において、相互作用がいかに進んでいくかを探ったものである。その結果、これまでの先行研究の結果も併せて、日本文化においては、初対面二者間の会話では、目上に当たる話者が、話題をより多く導入しながら会話を進行させていく、という大原則を明らかにした。これは、日本文化における年上を尊重する価値観、年功序列の社会構造などと無関係ではあるまい。しかし、同時に、「性」の要因がその大原則に微妙な影響を与えていることも明らかになった。この「性」の要因の影響については、各々の文化によって異なることが予想される点でもあり、今後、比較文化語用論 (cross-cultural pragmatics) 的観点からの研究も必要になってくる。それらの結果を踏まえた上で、「性」の要因を politeness の普遍理論に組み込む必要があるのかどうか等について、さらに検討していく必要があると思われる。

今後は、この「性」の要因の影響を探っていくと同時に、今回の話題導入頻度に関する全体的傾向を踏まえた上で、全体的傾向から逸脱する例外的会話の質的分析も併せて行っていくことによって、「話題導入頻度」に関して、原則からはずれる場合の条件や特徴を明らかにしていき、話題内容や個人の会話スタイル等、年齢、社会的地位、性以外の要因が、話題導入の仕方や頻度、すなわち、文化的に規定されている「話す権利」といかに関わっているのかについても探っていきたいと考えている。

〈注〉

1) 本研究の一部は、科学研究費助成による。課題番号：一般研究（C）17680312

また、本論文は、1996年10月6日、京都外国語大学で行われた平成8年度日本語教育学会秋季大会で口頭発表したものに加筆・修正を行ったものである。

- 2) いわゆる主婦と働いている女性とは、異なる会話スタイルを持つことが予想されるので、本研究では、男女共に有職者を対象とすることにした。
- 3) 「対話相手」として選ばれた被験者は、被験者の都合等によって異なるが、だいたい3名のベースと会話を行うよう計画されている。
- 4) 文字化資料のデータベース化については、東京都立大学の西郡仁朗氏に多大なるご協力をいただいた。また、西郡氏には、後出の発話の認定、ライン変え、話題導入カテゴリーのコーディングにおいて、第二認定者としてもご協力いただいた。記して感謝の意を表したい。尚、データベース化については、現在も進行中であるが、完成した際には何らかの形で公表したいと考えている。
- 5) 絶対的な基準はないが、この値が0.7未満であれば、コーディングの定義、分類方法等々に問題があると見なしたほうがよいとされている。また、0.75以上は、大変信頼性が高いと見なしてよいとされている。
- 6) フォローアップ・アンケートの細かい集計・分析は、現在進行中である。

〈付記〉最後に、ご多忙にもかかわらず、本研究に快くご協力下さいました被験者の皆様方に、この場を借りて、心より御礼申し上げます。

## 引用文献

### =日本語文献=

- 宇佐美まゆみ… (1993 a) 「初対面二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー：話者間の力関係による相違—日本語の場合」、ヒューマン・コミュニケーション研究、日本コミュニケーション学会、第21号、25—39.
- …………… (1993 b) 「初対面二者間会話における会話のストラテジーの分析：対話相手に応じた使い分けという観点から」、学苑647、昭和女子大学近代文化研究所、37—47.
- …………… (1993 c) 「談話レベルから見た“politeness”：“politeness theory”の普遍理論確立のために」、ことば、現代日本語研究会、14号、20～29.
- …………… (1994 a) 「言語行動における“politeness”の日米比較」、スピーチ・コミュニケーション教育（日本コミュニケーション学会）、30—41.
- …………… (1994 b) 「場面に応じた「ね」の使い分け」、『職場における女性の話しことば』（東京女性財団1993年度助成研究報告書）、51～60.
- …………… (1994 c) 「性差か力（power）の差か：初対面二者間の会話における話題導入の頻度と形式の分析より」、ことば（現代日本語研究会）、15号、53～69.
- …………… (1995) 「談話レベルから見た敬語使用：スピーチレベルシフト生起の条件と機能」、学苑第662号、昭和女子大学近代文化研究所、27～42.
- …………… (1996) 「言い切られていない発話の“politeness”」、昭和女子大学研究奨励補助金による研究報告書
- 宇佐美まゆみ・嶺田明美 (1995) 「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン：初対面二者間の会話分析より」、日本語学・日本語教育論集、第2号、名古屋学院大学留学生別科、130～145.
- メイナード、泉子・K (1993) 『会話分析』、くろしお出版

= 英語文献 =

- Bakeman, R. and Gottman, J. (1986) *Observing interaction : An introduction to sequential analysis*. Cambridge University Press.
- Brown, G. and Yule, G. (1983) *Discourse analysis*. Cambridge University Press.
- Brown, P and Levinson, S. (1987) *Politeness : Some universals in language usage*. Cambridge University press.
- MacWhinney, B. (1991) *The CHILDES project : Tools for analyzing talk*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- MacWhinney, B. and Snow, C. (1990) The Child language data exchange system : An update. *Journal of Child Language*, 17, 457 – 472.
- Usami, M. (1993) Politeness in Japanese dyadic conversations between unacquainted people : Influence of power asymmetry. *Paper presented at the 10th World Congress of Applied Linguistics, Amsterdam, Netherland*.
- Usami, M. (1994) Politeness and Japanese conversational strategies : Implications for the teaching of Japanese. *Qualifying paper submitted to Harvard University, Graduate School of Education*.
- Usami, M. (1995) Discourse politeness in Japanese conversation : Some implications for a universal theory of politeness. *Doctoral dissertation proposal submitted to Harvard University, Graduate School of Education*.
- Usami, M. (1996) Discourse politeness in Japanese conversation : From the results of speech-level shifts and topic management strategies, ” in special sessions : round table “Culture-specific behaviours and language teaching : Across disciplinary discussions ” (with three other presenters). *Paper presented at the 11th World Congress of Applied Linguistics at Jyväskylä, Finland*.
- Yule, G. (1996) *Pragmatics*. Oxford University Press.